全電源喪失の記憶

証言　福島第1原発

13

どうにもなりません

東電、なすすべなく

■第4章「東電の敗北」

3月15日午前2時ごろ、東京・霞が関の合同庁舎の執務室で仮眠を取っていた原子力安全委員会委員長の班目春樹(62)は、交代で首相官邸に詰めていた委員長代理の久木田豊(63)からの電話で起こされた。

「かなり大変なことになっている。すぐに来てもらった方がいい」

東京電力福島第1原発1号機の爆発で信用を失った班目だが、官邸への助言は続いていた。14日午後も、2号機の対応をめぐって第1原発所長の吉田昌郎(56)と電話で意見を交わしたばかりだった。

東京電力や原子力安全・保安院など関係者の作業スペースとなっていた首相官邸2階の大部屋に慌てて駆け付けた班目に久木田が尋ねた。

「班目さん、ドライウェルベントって知ってますか?」

「えっ?」

2人とも聞き覚えのない言葉だった。東電が進めていたドライウェルベントは、格納容器(ドライウェル)から直接、蒸気を出す方法で、環境への影響は甚大だ。だが、そうしなければ格納容器自体が破損し、さらに深刻な被害が出る可能性が高い。班目は危機の重大さをすぐに理解した。

▲記者会見に臨む原子力安全委員会の班目春樹委員長㊨と久木田豊委員長代理＝2011年7月15日、東京・霞が関

久木田はこの少し前、東電の敗北の瞬間を目の当たりにしていた。官邸5階の首相応接室で経済産業相の海江田万里(62)が東電の原子力品質・安全部長川俣晋(54)に状況の説明を求めた時のことだった。

「申し訳ありません…。いろいろと努力しましたが、もうどうにもならない状況です…」

川俣はそこまで言うと涙を流し、言葉を継げなくなった。肝心のドライウェルベントも弁を開く操作がうまくいかず、格納容器圧力が下がらない。制御不能の原発を前に、東電はなすすべがなくなっていた。

班目は保安院や官邸の危機管理担当者らとともに首相応接室に呼び出された。そこにいた海江田が、いきなり言った。

「東電が第1原発から撤退したいと言っている。意見を聞かせてほしい」

事故の翌朝、第1原発視察からの帰路、ヘリコプターの中で思い浮かべた最悪の光景が、班目の脳裏によみがえった。

撤退すれば放置された原子炉や核燃料プールから汚染が広がり続け、やがて福島第2原発や東海第2原発にも近づけなくなる。計11基の原子炉とプールが制御不能になる悪夢が現実になろうとしていた。

「撤退すれば現場の状況が分からなくなる。再び近づくのは困難です」

「東電が撤退して自衛隊や米軍が後始末するなんて無理だ」

班目は保安院幹部らとともに撤退に強く反対した。だがその場の誰にも、事故の進展を食い止める具体的な方策があるわけではなかった。

(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信　太田久史)